ドラえもんに学ぶケアするもののこころ

―心理臨床学的視座―

The Sincerity of Care Giver Learned from the Comic “*DORAEMON*”：A Clinical Psychological Perspective.

林　　智　一[1]

Tomokazu Hayashi

Abstract

The comic “*DORAEMON*” by Fujiko F. Fujio is very popular in Japan and other Asian countries. This work depicts universal human psychology. Since all Japanese are familiar with its contents, it is considered useful as an example or teaching material for learning the basic attitudes necessary for care givers. SEWASHI, the character in the work, is an egoistic person, but care givers are also in danger of dominating care users with their own views of humanity and values. DORAEMON is not a well-made robot. However, that is why it is able to empathize with NOBITA, an underachiever. Care givers may be able to demonstrate empathy like DORAEMON toward users by being aware that they too will die and by being aware of their own weaknesses and imperfections.

Ⅰ　はじめに

藤子・F・不二雄（以下、藤子Fと略記）のマンガ『ドラえもん』は、1969年に小学館の学習雑誌６誌（『よいこ』、『幼稚園』、『小学一年生』、『小学二年生』、『小学三年生』、『小学四年生』）の1970年１月号にて連載が始まった。学習雑誌の連載マンガということで読者が限定されており、当初から大人気を博したというわけではなかった。むしろ「あまり注目もされずひっそりとしたスタートだった」という（小学館ドラえもんルーム，1998）。

しかし、1974年に「てんとう虫コミックス」として単行本化されたことを契機として人気に火が付いた。また1979年からはテレビアニメ化され、その人気に拍車をかけることとなった。なお、テレビアニメは以後、2022年現在まで続く長寿番組となっている。

アニメ映画にもなり、1980年に長編映画第一作『ドラえもん　のび太の恐竜』が公開されて以来、2022年現在41作品が制作されている。なお、映画原作として短編から派生した「大長編ドラえもん」シリーズの連載は、藤子Fの死去する1996年まで続いた。

横山（2005）によれば、『ドラえもん』は小学校、中学校の教科書、さらには大学入試問題にも登場し、アジアの国々でも広く人気の作品となっているという。およそ日本で生まれ育ち、マンガを読んだりテレビ番組を視聴したりしてきた人であれば、何らかの形で『ドラえもん』を知っていると言っても過言ではないだろう。

本作品は、藤子Fの得意とする生活ギャグマンガであり、エンタテインメントとして優れていることは論を待たない。しかし、ただ単にギャグやストーリーが面白いというだけでは、その人気を説明しきれないように思われる。

子どもから大人まで、広く愛される『ドラえもん』の魅力の一つには、人間の普遍的心理が描かれている点があると推察される。勉強もスポーツもだめな、のんびり屋の怠け者である「のび太」、子守ロボットではあるが、のび太に簡単にだまされて「ひみつ道具」を奪われたり、大嫌いなネズミを見てパニックとなって地球ごと吹っ飛ばそうとしたりするなど、おっちょこちょいな一面を持つ「ドラえもん」、ガキ大将で粗暴、わがままな「ジャイアン」、強い者にはへつらうが弱い者、とりわけのび太に対しては冷酷で、嫌みなうぬぼれ屋の「スネ夫」、マドンナ的存在であ

1　香川大学医学部・教育学部

りつつ、強迫的に入浴にこだわる「しずちゃん」（テレビアニメおよび映画では「しずかちゃん」）など、それぞれが人間の持つ多様な側面、とりわけ弱さや愚かしさを戯画化したようなキャラクターである。

それゆえ本作品は、読み方次第で人間という存在について、さまざまなことを考えさせてくれたり、気づかせてくれたりするという、多面的で豊潤な魅力を有しているように筆者には感じられる。読者である我々は、のび太とドラえもんを中心とするキャラクターたちの言動の滑稽さや数々の失敗を笑う。しかしながら、その一方で自分自身のふだんのふるまいや折々のこころの深奥を見つめてみると、自分の中にも“小さな彼ら”のいることに気づかされ、身につまされるようなところがないだろうか。

作中のキャラクターは、マンガとして誇張はされているが、みなきわめて人間的な人物なのである。それが藤子Fのあたたかいまなざしで描かれているため、多くの読者はそこに密かな親近感を覚えて共感したり、人間というものの持つ弱さや愚かしさすら、いとおしく感じられたりするのである。

このように日本人にとってポピュラーで、内容について詳細に紹介しなくても共通理解が得られやすい点、普遍的な人間心理が描かれている点などから、広く人間のいとなみについて考える際、本作品はある種、例題や教材として有用であると思われる。

筆者はこれまで、『ドラえもん』をもとにして、作中に見られる人生観やケアのありようといったテーマについて、論考を試みてきた（林，2009；2022a）。本研究では、マンガ『ドラえもん』における子守ロボット、すなわち子守というケアに関わるものとしてのドラえもんを中心に、ケアをめぐって筆者なりに本作品から学んだり考えさせられたりした点について整理する。そして、それをもとに、ケアするものに必要な基本的態度や姿勢について検討することを目的とする。

なお、ケアにかかわる具体的領域としては、医療や介護、福祉、教育、子育てなどが連想されるかもしれない。また、家族やボランティアとして無償でケアする場合、すなわちケアラー carerもあれば、専門職として有償でケアする職種、すなわちケアギバー caregiverもある。筆者自身はカウンセリングや心理療法などの心理臨床に携わる専門職であるため、心理臨床学的視座から、職業としてのケアに軸足をおくこととなるだろう。だが、可能な限り広く、人が人に支援的にかかわるいとなみとしてケアを捉え、考察を進めていきたい。

Ⅱ　テキスト

『ドラえもん』の単行本には、短編では小学館の「てんとう虫コミックス」全45巻、『ドラえもんプラス』（全６巻）、「藤子・F・不二雄全集」の『ドラえもん』全20巻、中央公論社の「藤子不二雄ランド」の『ドラえもん』全45巻、さらに大長編では「てんとう虫コミックス」大長編全24巻などがみられる。これらに加えて文庫版やアンソロジー、コンビニコミックまで含めると、数え切れないほどの種類が存在する。そもそも学習雑誌連載であったため、単行本未収録作品も多い。

そこで「ドラえもん学」を提唱した横山（2004）は、藤子Fの自選集であり、ディレクターズカット版であり、ベストセレクションでもあり、ほとんど改訂が完了していて、現在も入手しやすい、てんとう虫コミックス短編と大長編（その中でも藤子F自身の手の入った17作品）を「正典」として位置づけている。

本研究でも横山（2004）を参考にして、短編のてんとう虫コミックス全45巻（藤子，1974-1996）をテキストとする。ただし横山（2004）が正典としている大長編は、本研究では考察の対象から除く。あくまで「生活ギャグ」として「日常性に乱入した非日常性」の面白さを狙って描かれたという藤子F自身の発言を考えると（小学館ドラえもんルーム，1998）、短編が『ドラえもん』の本線であると思われるからである。

たとえば大長編の多くは、舞台が白亜紀の恐竜時代や宇宙などといった、日常を超えた異世界である。また、短編と同一のキャラクターがいじめっ子といじめられっ子という関係から友情に厚い仲間となっていったり、臆病なはずのキャラクターが勇敢に振る舞ったりといった変化や成長が見られる。

ところが、キャラクターたちの大長編における異世界での変化や成長は、日常生活を描いた短編に反映されることはなく、あたかもリセットされてしまったかのようで、両者の間に断裂を感じるのである。このように短編と大長編は同じ『ドラえもん』ではあっても微妙に似て非なるところがあり、両者はある種、マルチバースの平行宇宙のような存在と筆者は考える。

また米沢（2014）は、短編が「成長しない子どもたちの物語」であるのに対して、大長編は少年たちが冒険し、その中でたくましくなっていくという「教養的な部分もある少年小説の再生」であると述べている。きわめて正鵠を射た指摘であろう。そのように理解すると、両者に断裂の見られることにも納得がいくのである。

Ⅲ　セワシ的人間観をめぐって

１．なぜドラえもんはのび太のもとにやってきたか

「未来の国からはるばると」（てんとう虫コミックス第１巻。以後、巻数のみ記す）では、ドラえもんがなぜのび太のもとにやってきたのかが描かれている。タイムマシンで未来からのび太の部屋にやってきたドラえもんと、のび太

の「まごのまご」であるセワシから、のび太は「年をとって死ぬまで、ろくなめにあわない」という自分の将来について聞かされる。そして、ドラえもんは「ぼくはきみをおそろしい運命からすくいにきた」のだと言う。最初は半信半疑であったのび太も、19年後の結婚相手がジャイアンの妹、「ジャイ子」であると聞かされ、「いやだよぼく。あの子きらい」と、ショックを受けた様子であった。

「勉強もだめ、スポーツもだめ、じゃんけんさえ勝ったことがない」のび太は、この先も大学入試に失敗し、就職できずに自分で会社を興すものの火事で会社が焼け、倒産して借金取りに押しかけられることになる運命であるという。その借金が100年後のセワシの時代まで残っており、そのためにセワシのうちは貧乏で、「今年のお年玉がたった50円」だとセワシは嘆く。そのような運命を変えるべく、ドラえもんは、のび太の世話をすることになったのである。

２．ドラえもんと出会わなかったのび太の人生は不幸なのか―セワシ的人生観をめぐって―

（１）結果重視でプロセス軽視の見方

セワシは、のび太が将来「ろくなめにあわない」と言うが、はたしてセワシの示したような、ドラえもんと出会わなかった未来ののび太の人生は、不幸なのだろうか。のび太の不幸な運命を変えねばならないというのは、セワシ自身の見方によるものではないのか。

セワシは、最終的な結果からしかのび太の人生を見ていない。しかし、カウンセリングや心理療法などの心理臨床の世界では、結果だけでなく、そこに至るプロセスやその中での体験が重視される。

たとえば、のび太の起業から倒産までの一連のプロセスは、単なる失敗だろうか。セワシが未来から持参したアルバムには、1988年に会社を起業した記念写真や1995年、会社が倒産して借金取りが押しかけている姿が映っている。起業から少なくとも５年間は、会社が存続していたということである。それは、それなりに有意義な体験としてのび太の中に血肉化している可能性もあるのではないだろうか。

また、ジャイ子と結婚する未来が本当に不幸なのだろうか。セワシのアルバムには、６人の子宝に恵まれたのび太とジャイ子の写真もある。たしかに裕福ではなさそうであるが、どの写真でものび太がそれほど不幸そうな表情をしているようには、少なくとも筆者には見えない。ジャイアンの妹であり、粗暴なジャイ子を小学生ののび太が嫌うのはしかたがないかもしれないが、ドラえもんと出会わなかったのび太は、大人になってジャイ子の人間的魅力に気づいたのかも知れないではないか。

（２）のび太の主体性への無関心さ

このように、人生の幸・不幸は、のび太の感じ方次第である。たとえ不運な人生であっても、そこに肯定的側面もあることに気づき、否定的側面と肯定的側面を統合して、自身の人生に意味を見いだす場合がある。これは、Erikson（1950）の個体発達分化の図式における、高齢期の心理社会的危機である「自我の統合性 対 絶望」のテーマである。

晩年に至ったのび太は、自身の人生を振り返ってどう感じるのだろうか。ひょっとしたら、不運な人生ではあったが、それなりに良い人生であったと考えている可能性もあろう。

ところが、セワシにとっては、ドラえもんと出会わなかった未来において、のび太自身が自分の人生をどう評価しているかなど関心のらち外のようである。「年をとって死ぬまで、ろくなめにあわない」、「おそろしい運命」だと思いこんでいるのは、あくまでもセワシおよびドラえもんなのである。

（３）エゴイズムに基づく他者の運命の操作

そもそもドラえもんをのび太のもとに送り込んだのは、セワシ自身の貧乏な境遇を変えたいというエゴイズムによるものと感じられる。けっしてのび太の幸せを願って、というような利他的な意味合いではないだろう。

さらに「未来の国からはるばると」（第１巻）では、のび太の運命が変わり、ジャイ子と結婚しない未来になったら、セワシは生まれてこないことになるのではないかと、のび太が疑問を呈する場面がある。そのタイムパラドックスについて、セワシは「ほかでつりあいをとるから」とこともなげに答える。たとえば大阪に行こうとした場合、飛行機や鉄道、自動車などいろんな乗り物や道筋があるが、方角さえ正しければ大阪に到着できるという「大阪理論」（小学館ドラえもんルーム，2006）で説明する。

セワシは、のび太の運命を変えることでその存在が消滅してしまう人間のいることについて、まったく斟酌していない。さらりと読み飛ばしてしまいそうな場面であるが、実はきわめて恐ろしい内容が描かれているのである。

このようにセワシは、自分のエゴイズムによって影響を受ける多くの他者の運命には、まったく無関心のようである。これは、未来人のセワシだからこそ、ということなのだろうか。藤子F自身がどのように考えてこの場面を描いたのかはわからないが、筆者には、むしろ現代に生きる我々の、エゴイスティックな姿の写し絵のように感じられる。現代人への痛烈な風刺や批判と受け取れるのである。

３．ケアするものの陥穽としての“セワシ化”

ケアするものは、当然ながらそれぞれの人間観、人生観、価値観、思想信条、ケアの理念などを有している。一方、ケアを利用するものも同様であり、本来、ケアにおいては、ケアを利用するものの主体性やニーズ、すなわち自律性の尊重が原則である。なお、自律性とは、人が自分な

りのやり方と選択に従いながら、一日一日をどのように生きていくかということに対して感じているコントロールと処理と自己決定の主観的能力と定義される（佐藤，2014）。

ところが、ともすれば我々は、ケアを利用するものの自律性を意識的、無意識的を問わず忘れたり無視したりして、自身の人間観や人生観、価値観などを、ケアを利用するものに押しつけてしまうことがないだろうか。しかも、困ったことにそのほとんどは、善意という名の下に行われるように思われる。それは、「未来の国からはるばると」（第１巻）を深く考えずに読むと、セワシが一見、親切な善意の存在に見えてしまうこととともよく似ている。

利他について研究する美学者の伊藤（2021）は、「特定の目的に向けて他者をコントロールすること」が「利他の最大の敵」であるとしている。そして、そうならないためには、相手の言葉や反応に対して、真摯に耳を傾け、「聞く」こと以外にない、と言う。

これは、まさにケアするものがエゴイスティックなセワシになって、ケアを利用するものをコントロールしようとする、いわばケアするものの“セワシ化”を戒めるような意味合いでの言及であると考えられる。「聞く」ことをなりわいとする心理臨床家は、クライエントなどのケアを利用するものの話を「聞く」ことに過大な自信を持っているように思われるが、はたして伊藤（2021）の言うような意味で聞けているだろうか。

これは、心理臨床家にとってある意味、耳の痛い指摘であり、かつ自戒とすべき言葉であると筆者は考える。ケアするものが自身の人間観や人生観、価値観などにとらわれて、独善的に他者の人生を操作しようとする“セワシ化”の陥穽は、心理臨床家においても免れないからである。今一度、自分自身を振り返る必要があろう。

なお、心理臨床家は、通常であれば、自身のカウンセリングや心理療法の事例をスーパービジョンやケースカンファレンス、関連学会などで報告し、第三者的視点からの意見をもとにみずからのケアのありようを検討する機会を得ている。そのような自己相対化あるいは自己客体化が、ケアのいとなみにおいては不可欠であろう。

Ⅳ　ドラえもんとのび太の関係について

１．ドラえもんは見下ろさない

（１）ケアを利用するものと同じ地平に立つということ

「ドラえもん大事典」（第11巻）によると、ドラえもんの身長は、129.9cmである。これは、連載当時の小学校４年生の平均身長から引用したという（小学館ドラえもんルーム，1998）。つまり、ドラえもんは、のび太とほぼ同じ身長だと考えることができる。

ドラえもん人気に火がついて以来、各地のデパートなどで開催されたぬいぐるみショーに使われるぬいぐるみのドラえもんが大きすぎたため、「小さな子どもから見たら巨人になってしまう。ドラえもんを、子どもたちは見上げることになってしまう」として、藤子Fは中止を強く要望したという。藤子Fは、ドラえもんは「小学３，４年生の子どもたちと同じくらいの大きさか、もしくは少し小さいくらい」だと述べている（小学館ドラえもんルーム，1998）。

なお、学年別の学習雑誌連載では、のび太の身長が学年ごとに描き分けられている（Pen＋，2012）。『大人のための藤子・F・不二雄』（Pen＋，2012）には、学習雑誌『小学一年生』から『小学六年生』までの、のび太とドラえもんが並んで立っているコマの比較図が掲載されている。それを見ると、最初はドラえもんより背の低かったのび太が５年生、６年生では、ドラえもんの身長を追い越していることがわかる。藤子Fがそれぞれの学年の読者である子どもたちの成長にともなう目線の変化をいかに重視していたかが実感されるエピソードである。

いずれにしても、ドラえもんは子守ロボットであるが、子守すなわちケアを提供する対象であるのび太をけっして上から見下ろすことはない。ケアするものがケアを利用するものと同じ地平に立ち、同じ目線の高さにいることは、人としての対等性や平等性といった点から重要であろう。それが心理臨床で重視される共感の基盤ともなる。

パーソンセンタードアプローチを提唱したRogers（1975）は、共感について、こちら側の考えや価値を一時保留停止にして、相手の世界を生きて経験し、そこで感じ取ったものをコミュニケートすることであると述べている。カウンセリングや心理療法において、共感はもっとも基本的で重要なセラピストの機能であり、共感による内側からのクライエント理解と、外側からの客観的・知的理解が調和を持つことに意味があると言われている（角田，1992）。これらのことから、共感とは、相手の目線に立って、相手の目線で世界を見る体験と言い換えられるかもしれない。

ところが、専門職としてのケアするものは、自身が専門性を有するというだけで、ケアされるものよりも一段高みにあるかのような錯覚をいだいてしまうこともある。人間としての対等性や平等性は、理念としては理解されやすいが、本当にそれを実現していくのは、たやすいことではない。まさに、“言うは易く行うは難し”なのである。

ケアにおけるナラティヴについて論じた宮坂（2020）は、「私たちは＜いずれ死んでしまう存在＞どうしであるがゆえに、適切な聞き手になれる」という「弱さの仮説」を提示した。そして、「ケア者の側の死の可能性が、病を抱える人へのケアを真に成り立たせる要件であるように思えてならない」と述べている。それが他者への無条件の肯定的関心や共感的理解の前提となるという。

たしかに死は、誰にでも等しく訪れるものである。ある意味、死の前にはすべての人間が対等であり平等であると言える。みずからの死を自覚することによって、ケアする

ものもケアを利用するものも、ともに同じ地平に立つものと実感され、それが共通基盤となって両者の間につながりができて、初めて対話や共感が生起するという考えは、首肯できるものである。

（2）ドラえもんはいつもそばにいる―アクセシビリティ―

ドラえもんは、のび太と起居をともにし、のび太がピンチに陥った際には叱責したり、あきれたりしつつも、結局はひみつ道具で手助けをしてくれる、というのが本作品の基本的フォーマットである。このようにケアするものがいつでもそばにいて見守ってくれていて、必要なときにスムーズにケアを求めることができるというアクセシビリティの高さは、多くのケアするものに対して、ケアを利用するものが求める点である。

（3）傷ついた癒やし手としてのドラえもん

「未来の国からはるばると」（第１巻）で、ドラえもんは、セワシから「できのいいロボットじゃない」と言われているように、子守ロボットとして理想的なわけではないようである。たしかに、作中をとおしてときに失敗することもあれば、のび太を感情的に叱責したり、罵倒したりすることもある。

また、作中では結局、のび太は勉強もスポーツもだめなままであり、セワシの望むような世俗的成功とは無縁そうに思われる。そのような意味では、子守ロボットとしてセワシから託された使命に応えているのかどうか、疑問になってくる。

だが、そのように自分自身が不完全なドラえもんだからこそ、劣等生であるのび太にも共感できるのではないだろうか。分析心理学には、傷ついた癒やし手という概念がある。癒やし手自身が傷を負っていることが、癒やしの力をもたらすという考え方である（Sedgwick, 1994）。すなわち、ケアするものも傷ついていればこそ、ケアを利用するものの感じる痛みをみずからの傷に照らして感じ取り、そこに共感が生起しうるのだと考えられる（林，2022b）。

（4）教えるのではなく体験から学ばせる

本作品の典型的なストーリーとして、ドラえもんがのび太にせがまれたり、だまされたりしてひみつ道具を渡してしまうのだが、ひみつ道具の便利さに溺れ、のび太が調子に乗りすぎて失敗する、というものがある。そこには、のび太がドラえもんやその秘密道具に依存することに対しての藤子Fによる警鐘や教訓が付与されているのだが、その点については次節で詳述することとする。

ひみつ道具にのび太がしっぺ返しを食らうというストーリーからは、のび太に対して、あえて失敗させ、その失敗から学ぶ機会を提供している、という見方もできるように思われる。多くの作品では、ドラえもん自身にどのくらいの意図性があるのかは不明である。だが、明らかに意図的にのび太に失敗を体験させ、その失敗から学ばせている例として、「どくさいスイッチ」（第15巻）があげられる。

どくさいスイッチは、自分に反対するもの、邪魔になるものを消し去り、はじめからいなかったことにしてしまうひみつ道具である。ジャイアンを消し、スネ夫を消したのび太は、うっかり「だれもかれも消えちまえ！」と言ってしまう。そうして誰もいなくなった世界で絶対的孤独を感じ「ジャイアンでもいいからでてきてくれぇ！」と叫ぶのび太のもと、どこからかドラえもんがあらわれ、実は独裁者を懲らしめるための道具であったことがあかされる。もとどおりになった世界ですっかり反省したのび太は、いつものようにジャイアンとスネ夫にからかわれながらも「まわりがうるさいってことは、楽しいね」と述べるのである。

ケアするものがケアを利用するものの失敗を恐れて過保護になったり、なんでも危険の先回りをして、事前に注意したり最適解を教え込もうとしたりするのは、本当に援助的関わりと言えるのだろうか。ケアを利用するものの自己決定権の中には、リスクを冒す権利も含まれる。たとえ失敗のリスクがあることはわかっていても、本人がリスクを納得したうえでそれを望むのであれば、リスクを冒す権利を尊重すべきであろう。失敗したとしても、その失敗から学べば良いのである。人間の成長や発達とは、そのようなものではないだろうか。

また、教条主義的に“こうすべし”、“かくあるべし”と教え込んでも、そこに体験をもとにした実感が伴わなければ、ケアを利用するものには納得できないだろう。仮にそれを受け入れたとしても、表面的な知的理解に終わってしまい、定着しづらいかもしれない。

ここで重要なのは、のび太の成長の方向は、ドラえもんとのび太の両者の双方向的な関わり合いの中で生成されているということである。ドラえもんがのび太のめざすべき方向を、一方的に指示しているわけではない。これは、伊藤（2020）の言う「生成モード」のコミュニケーションであり、カウンセリングや心理療法の根底にある理念に近い。

ただし、ケアを利用するものが破滅的な失敗に至らないように、ケアするものがしっかりと見守って安全を確保しているという点も重要であると筆者は考える。「どくさいスイッチ」（第15巻）においても、あくまで独裁者を懲らしめるための道具であったからこそ、ドラえもんは安心してのび太に与えることができたのである。

これらのことから、ドラえもんはのび太に失敗という体験から学ばせることにおおむね成功しているように思われる。作中ののび太に目に見える成長は見られないのであるが、のび太が成長していったのでは、ギャグマンガとして成立しなくなるため、そこはしかたのない点であろう。

２．専門職としてのジレンマを抱えながらケアを続けること―共感をめぐる再考―

ドラえもんとのび太の関係は、「さようなら、ドラえもん」（第６巻）で未来に帰ったドラえもんが「帰ってきたドラえもん」（第７巻）でのび太のもとに戻ってきて以来、変化したと言われている。ひみつ道具を使ったことによるアクシデントによって未来から戻ってきたために、以後は「のび太をおもりするという使命」ではなくなり、「守るものと守られるものではない。そこには、ただただ、深い友情関係がある」（小学館ドラえもんルーム，1998）という関係へと変化していったものと考えられている。

しかし、専門職としてケアするものは、ドラえもんとのび太のように、ケアを利用するものと「ただただ、深い友情関係がある」親友ではない。また、ドラえもんのようにケアを利用するものと起居をともにすることも、基本的にはない。あくまで限定的な時間と場面設定の中で、限定的な人間関係としてケアに携わるのが、専門職としてのケアするものである。そこに専門的ケアの限界やジレンマがある。

そのような限られた条件の中にあればこそ、相手の目線に立って世界を体験するという共感という観点が、ケアするものの専門性として意味を持つのではないかと筆者は考える。ケアをめぐっては、ケアするものが上、ケアを利用するものが下といった上下関係、あるいは支配－被支配といった権力構造を生みやすい。だが、客観的、第三者的見方を一時保留停止にして、ケアを利用するものの目線に立てることが、ケアにおける上下関係や権力構造を見直し修正する手立ての一つとなるだろう。

また、そのような能力がケアするものの専門性を担保するようにも思われる。ケアにまつわる専門的知識・技能がどんなに高くても、ケアを利用するものの意思や主体性を無視し、それらにそぐわないケアを行うのであれば、意味を成さないからである。

筆者の研究テーマの一つである認知症高齢者の心理的ケアを例に考えてみよう。重度になればなるほど、認知症高齢者とのコミュニケーションは困難となり、認知症高齢者の意思や主体性を活かしたケアが難しくなる。その結果、ケアするものの思い込みや都合によるケアに陥り、ひいては認知症高齢者の機能低下や加齢による衰退を助長する危険性を有する。

Kitwood（1996）は、それがけっして介護者の悪意によるものではないと言う。認知症高齢者の成人としての個性や尊厳、自尊心、自己決定権、自立性を否定するような介護者のあり方は、認知症高齢者の視点から世界を見るための洞察力に必要な理解力や共感、想像力の欠如によるものだと述べている。

このことから、ケアを利用するものに対しての理解力や共感、想像力の欠如は、ケアを非人間的な、冷たい“作業”のようにしてしまう危険性をはらんでいるということが理解されよう。これは認知症高齢者のケアに限定されないように思われる。

Ⅴ　ドラえもんはのび太の人生を変えたのか

１．両刃の剣としてのドラえもんとそのひみつ道具―のび太の依存と自立をめぐって―

佐藤（2007）は、「ドラえもんはのび太を劣等感から救ってくれるファンタジー」であるが、「ファンタジーから覚めれば現実に直面させられ苦い思いをする。その度毎に学習をすれば良いのであるが、現実的な対処行動が身につかないのがまた多くの人の共感をえるのだろう」と言う。このように、ある種のファンタジーとしてその意義を認める立場がある一方、ドラえもんがのび太の受け身的性格を変えるための学習のチャンスを奪っているという批判もある（林・木全，1999）。さらには、のび太がひみつ道具への重度の依存により「幼児的、誇大的万能感の回復、保持、増進の恐るべき心の病にかかってしまう」（作田・山本，1998）という危険性までも指摘されている。

このように、ドラえもんとそのひみつ道具の存在は、のび太の成長にとって両刃の剣という側面を有している。ただし、藤子F自身がその危険性に気づいていたためか、学習雑誌『小学一年生』ではひみつ道具の楽しさが強調されるが、『小学二年生』になるとのび太がひみつ道具のしっぺ返しをくらうようになり、やがて『小学四年生』からはドラえもんが道具を使用することをためらったり、のび太に道具を与えたことを反省し始めたりするという（小学館ドラえもんルーム，1998）。

ドラえもんとそのひみつ道具への依存に対して、学年が上がるにつれ、年齢相応のある種の警鐘や教訓が付与されていくのである。あまり教訓的になってしまうことには、ギャグマンガとして、作品の幅を限定してしまうという負の側面もあったかもしれない。だが、「のび太の場合、ハイテクの力を借りるが、最後には必ず自分の力で解決しようと」しており、「これはすごい意志の力である」、「こうしたところが、『ドラえもん』の健全性であり、人気の秘密である」（作田・山本，1998）という肯定的評価もある。

筆者も、そのような本作品の健全性に、子どもから大人まで幅広い人気を得た理由があると推察する。ドラえもんとそのひみつ道具へののび太の依存と自立という難問について、藤子Fは、学年誌ならではの読者の成長・発達という構造にも助けられ、ほどよい着地点を設定しているように思われる。

コンピュータなどのハイテク技術が進歩した現代社会において、ドラえもんのひみつ道具に近いものは、すでに多数、存在し、ゲーム依存、ネット依存などの今日的問題が生じている。ドラえもんとそのひみつ道具への依存の問題

は、すでにのび太一人のものではなくなっている。そのような点でも、『ドラえもん』は、時代を先取りした作品であった。

ところで、専門職としてのケアするものが有する専門的知識・技能は、ある種のひみつ道具的な側面を持つ。それゆえ、たとえばケアするものの行う“○○療法”や“△△技法”といったものを、ケアするものもケアされるものも、ともに過信、盲信してしまうという、ひみつ道具依存が生じかねない。ここでは、事前にその適用の可否を問い、実施した結果について、ケアするものとケアを利用するものがその効果や意味について対等な立場で話し合えるようなプロセスが不可欠である。

さらに言えば、そもそもケアといういとなみ自体が、ケアを利用するものに対して依存と自立の葛藤を生じさせかねないものである。そこで重要になるのが、すでに述べた共感であり、ケアを利用するものの自律性や自己決定権を尊重するという観点である。

2．弱さの中に強さをみいだすまなざし

（1）ドラえもんの不完全さの功罪

作中ののび太は、相変わらず勉強もだめ、スポーツもだめという状態で、失敗を繰り返しており、劇的な成長は見受けられない。セワシがドラえもんをのび太のもとに送り込んだもくろみは、不首尾に終わっているとも言えよう。

しかし、表面的な結果からしか物事を見ず、エゴイスティックな、セワシ的人生観にのび太が染まることなく、失敗を繰り返しながらも自身のペースで成長し、長所や美点を伸ばしているという見方も可能である。セワシのおもわくどおりに機能しないドラえもんの不完全さが、逆にのび太の個性や主体性を守っているのである。

では、のび太の長所や美点とはなんだろうか。作中でもっとも端的に表現されているのは、「のび太の結婚前夜」（第25巻）におけるしずちゃんの父の台詞であろう。結婚前夜になって、のび太との結婚に惑いを生じたしずちゃんに対して父は、成人したのび太のことを「人のしあわせを願い、人の不幸を悲しむことのできる人だ」と評しているのである。

また、藤子F（1989）自身が「のび太は、あり余るほどにその人間の弱さとか、みにくさとか、人間のもつ様々な弱点を、全部ひとりで背負い込んだような人間なんです。（中略）のび太の強さというのは、20何年間かかっても少しも向上していないにもかかわらず、なお自分の理想像というものは失っていないということでしょうね」と述べているように、成長はしないが、一方で理想像や成長したいという意欲を維持し続けることがのび太の強さである。さらに杉田（2020）は、「生まれつきダメで、無力で、無能であること」が人間の普遍的生存条件であり、のび太はそれを本能的に知っているからこそ誰よりもやさしいのかもしれない、と言う。

両者に共通するのは、弱さの中に強さをみいだすまなざしであろう。弱さは、ときにやさしさ、そして強さに転じることもある。

言うまでもないことであるが、ここで言う弱さとは、のび太、すなわちケアを利用するもののみにあるわけではない。ケアするものであれ、ケアを利用するものであれ、人間なら等しく有するものである。このようなまなざしを持つことが、ケアといういとなみをあたたかく、血のかよった、人間的なものにするのではないか。

（2）自身の不完全さの認識と他者の不完全さの許容

セワシから「できのいいロボットじゃない」と言われる、いわば不完全な存在であるドラえもんには、このように功罪、相なす部分がある。これは、ドラえもんだけのことではない。我々もまた、けっして理想的な人間でも、理想的なケアするものでもない、不完全な存在である。もちろん、のび太がそうであるように、ケアを利用するものも同様である。

理想を目指して、可能な限りの完全さを求め、努力することの価値は言うまでもない。だが一方で、どこまで行っても不完全さは残る。そもそも、どのような状態を完全というのかも明確ではないだろう。

そこで連想されるのは、ほどよい母親 good enough motherという概念である。精神分析家のWinnicottによって提唱されたもので、「乳児への適度の心身の世話によって環境の快適さと対象としての恒常性を与える母親およびその役割遂行機能」（深津，2002）のことを言う。すなわち、完璧ではなくても、ほどよい母親による、ほどよい育児が良いという意味である。

だが、“ほどよさ”ほど難しいこともない。言うまでもないが、どこからどこまでがほどよいのかという絶対的定義はない。それではかえって完璧主義に堕してしまう。また、ケアするものとケアを利用するものの組み合わせやさまざまな状況によっても、そこでのほどよさは異なるだろう。自然にほどよくあれれば良いのだが、意図的にそれを目指そうとすると、たちまち袋小路に入り込んでしまうように思われる。

いずれにせよ、自分が不完全であっても、不完全なりに誰かの役に立てることはある。完全な人間でなければケアするものになれない、ということではないだろう。

自身の不完全さをわきまえながら、その中でケアを利用するものへのほどよい関わりを模索することが求められる。そしてその際には、すでに述べたように、ケアを利用するものの言葉や反応を「聞く」（伊藤，2021）ことが肝要である。

このように不完全な人間同士が関わり合い、支え合い、お互いにケアしたりケアされたりしながら、ともに生きているのが社会である。そこには、自己の不完全さを認識し

つつ、他者の不完全さも許容できるような、寛容性が求められるのではないか。それがこの世界に多様性と社会的包摂をもたらす、一つのポイントであるように筆者は考える。

３．ケアにおける社会・文化的視点

ドラえもんとのび太の関係から、テーマが広がりすぎたかもしれない。だが、個人が集まって社会を形成し、その社会の一員としての個人は、必ず社会・文化的文脈から影響を受けながら存在しているのである。

『ドラえもん』の物語は、ドラえもんやのび太、ジャイアン、スネ夫、しずちゃんといった、主に子どもたちの社会の中で展開している。そこには、いじめもあれば能力差やさまざまな格差もある。とりわけのび太のような、いろんな意味で弱いとされる子どもにとっては、たいへん残酷でストレスフルな社会でもあろう。

筆者は、『ドラえもん』の作品世界を桃源郷のように捉え、これが目指すべき理想の社会であるなどと言うつもりはない。作品の中には、子どもの“無邪気な残酷さ”とでも言うべき描写もないわけではないからである。たとえば前述の「どくさいスイッチ」（第15巻）のエピソードなどを想起されたい。ただし、そうやって互いに傷つけたり傷つけられたりしながら、それでも彼らがいつも一緒に遊んでいる姿に、読者である我々は、子どもらしいあたたかさや健全さ、レジリエンス（回復力、復元力）を感じて、どこかほっとしていることもまた、事実であろう。

子どもの社会は、大人の社会の写し絵である。そもそも子どもの社会と大人の社会は、本来一つの地続きのものでもある。したがって、先にハイテク技術への依存の問題に触れたように、『ドラえもん』を例題あるいは教材として、現代の社会・文化的な状況を読み解き、問題点を検討していくようなアプローチも可能かと考える。

ただ、社会・文化的要因にまで論を進めることは、心理臨床家として、個人の心理内界に主たる関心を有する筆者の力が及ぶところではないかもしれない。それでも、ケアの背後には家族、学校、職場、地域社会、国、そして人類といったさまざまな水準での社会・文化が存在し、その社会・文化のありようがケアに直接、間接の影響を与えていることに留意していきたいと思う。

Ⅴ　おわりに

ケアするものが自身の人生観にとらわれて他者の人生を操作しようとするセワシ化の危険は、免れないものである。だが、自分もまたいずれ死んでしまう存在であり、弱く、不完全であるという認識は、共感の根幹をなし、専門的知識・技能といったひみつ道具によって、ケアを利用するものの意思や主体性を損なうことへの自戒ともなろう。

さらに、ケアには倫理が求められる。すなわち、“かくあるべし”といった単一の答えではなく、多様な要因を勘案しながら、その状況の中でケアを利用するものへの最善を模索する姿勢が必要なのである。

このような倫理的判断には、困難がつきまとう。そのため、単純な正解のない、答えの出ない事態の中、問いを抱え続ける力である「ネガティブ・ケイパビリティ」（帚木, 2017）が必要である。

答えの出ない問いを抱え続けることに耐えかねたとき、ケアするものを支えてくれるのは、実はケアを利用するものの存在であったりもする。そのとき我々は、ケアといういとなみの醍醐味、すなわち人と人が関わりあうことのもたらすパワーを実感するのである。

引用文献

Erikson, E. H. 1950 *Childhood and Society*. W. W. Norton.（仁科弥生（訳）1977　幼児期と社会Ⅰ　みすず書房）.

藤子・F・不二雄　1974-1996　てんとう虫コミックス　ドラえもん（全45巻）小学館.

藤子・F・不二雄　1989　僕は、のび太。　小学二年生　小学館（Pen＋　2012　完全保存版　大人のための藤子・F・不二雄　阪急コミュニケーションズによる）.

深津千賀子　2002　ほど良い母親　小此木啓吾（編集代表）精神分析事典　岩崎学術出版社 pp.447-448.

帚木蓬生　2017　ネガティブ・ケイパビリティ―答えの出ない事態に耐える力―　朝日新聞出版.

林　公一・木全公彦　1999　大人になったのび太少年　宝島社.

林　智一　2009　ドラえもんと出会わなかったのび太の生涯は不幸なのか？―心理臨床学的視点による人生観に関する一考察―　中国四国心理学会論文集, **42**, 59.

林　智一　2022a ケアするものとしてのドラえもん―弱さの中に強さをみいだすまなざし―　日本心理臨床学会第41回大会発表論文集, 110.

林　智一　2022b 心理援助者養成教育における「傷ついた癒やし手」というジレンマを指導者はどう考え、いかに対応するのか―文献展望をもとにした一考察―　香川大学教育研究, **19**, 47－58.

伊藤亜紗　2020　手の倫理　講談社.

伊藤亜紗　2021「うつわ」的利他―ケアの現場から―　伊藤亜紗（編）「利他」とは何か　集英社　pp.17-63.

角田豊　1992　共感　氏原寛・亀口憲治・成田善弘・東山紘久・山中康裕（編）心理臨床大事典　改訂版　培風館 pp.211-213.

Kitwood, T. 1996 A dialectical framework for dementia. In R. T. Woods（Ed.）, *Handbook of the Clinical Psychology of Aging*. Wiley. pp.267-282.

宮坂道夫　2020　対話と承認のケア―ナラティヴが生み出す

世界―　医学書院.
Pen＋　2012　完全保存版　大人のための藤子・F・不二雄　阪急コミュニケーションズ.
Rogers, C. R. 1975 Empathic: An unappreciated way of being. *The Counseling Psychologist*, **2**, 2-10.
作田　明・山本敦司　1998　漫画キャラクター精神分析極秘カルテ　青春出版社.
佐藤隆一　2007 『ドラえもん』のび太くんの心性　村瀬嘉代子（編）統合的心理臨床への招待　ミネルヴァ書房 p.135.
佐藤眞一　2014　第１章　老いのこころと高齢社会　佐藤眞一・髙山みどり・増本康平（著）老いのこころ―加齢と成熟の発達心理学―　有斐閣 pp. 1-20.
Sedgwick, D. 1994 *The Wounded Healer: Countertransference from a Jungian perspective*. Routledge.（鈴木龍（監訳）1998 ユング派と逆転移―癒やし手の傷つきを通して―　培風館）.
杉田俊介　2020　ドラえもん論―ラジカルな「弱さ」の思想―　Pヴァイン.
小学館ドラえもんルーム　1998　ド・ラ・カルト　小学館.
小学館ドラえもんルーム　2006　ドラえもん深読みガイド　小学館.
横山泰行　2004「ドラえもん学」研究序説　野比家の謎　日本文芸社.
横山泰行　2005　ドラえもん学　PHP研究所.
米沢嘉博　2014　藤子不二雄論　FとⒶの方程式　河出書房新社.